ISSN 1346-2601 (Print)
ISSN 2436-5408 (Online) 2024 年 12 月 25 日公開

助監督使用台本による小津安二郎監督作品生成過程の分析

宮本 明子（同志社女子大学表象文化学部 准教授）
E-mail amiyamot@dwc.doshisha.ac.jp
松浦 莞二

要旨

2023 年、小津安二郎監督作品の撮影に使用された台本が発見された。小津組の助監督が使用した『麦秋』（1951）、『お早よう』（1959）、『秋日和』（1960）、『秋刀魚の味』（1962）の4冊である。いずれにも撮影時の書き込みがあり、台詞やト書きに変更が多数加えられている。本稿はこれらを分析し、小津が定説に反して、台本完成後に多くの変更を行っていたことを明らかにするものである。

abstract

In 2023, scripts used for the shooting of films directed by Ozu Yasujiro were found. These were the four scrips for *Early Summer* (1951), *Good Morning* (1959), *Late Autumn* (1960), *An Autumn Afternoon* (1962) used by the assistant director of the Ozu crew. All contained annotations from the shoot, with many changes added to the dialogue and actions. In this study, they will be analysed, and bring to light that against common belief, Ozu had made many changes to a finished script.

序

小津安二郎は映画監督として知られるが、脚本家としての一面もある。初期作品から、自身の作品にはほぼすべて何らかの形で脚本の成立に関わっており、内田吐夢や田中絹代作品への脚本提供、大島渚作品での脚本監修も行っている [1]。脚本についても深く関わった監督と言えよう。

さて、その小津の脚本や台本についてはこれまで、第一稿が決定稿であり、脚本完成後に変わることはないと言われてきた。つまり、多くの監督とは異なり、書き上げた脚本第一稿が決定稿となり、そのまま撮影や編集に使用される台本が作成される。撮影中も誤字脱字等の訂正を除き、台本の台詞やト書きを変更するようなことはない、と言われてきたのだ。

たとえば、小津自身が 1940 年の時点ですでに、「一稿即ち決定稿だ」[2]と述べている。小津の監督第一作から脚本に関わり、『晩春』（1949）以降はすべての小津映画で小津と脚本を執筆した野田高梧は戦後の座談会において、「われわれはちやんと清書してある。直すものも何にもない。これ（著者注：プロデューサーに提出した脚本）を直せといつたら怒る。決定稿なんだから……」[3]と述べている。

小津に近い関係者の証言も多く残っている。野田高梧の妻・静は次のように振り返っている。

> 小津さんは、セリフを絶対変えませんよ。撮影に入っても。（中略）だから本が出来た時は、もう映画出来てるのとおんなじね。[4]

小津は撮影中に台詞を絶対に変えない、本（脚本）が出来たらもう完成したのと同じだ、という主旨である。さらに、もし変更したいときは、小津が野田高梧に電話をかけてきたとも証言している。

静の発言を裏付けるのが、静の娘・玲子の次の発言である。玲子は、小津や野田が書いた脚本の浄書をしていた。静と同様、脚本執筆時の小津に近かった人物である。

> 撮影に入って、たとえば「いいわよ」の「よ」を取るか取らないかって時にね、現場の小津さんから電話がかかって来るわけ「取っていいですか」って。そういう意味でね、すごく仕事に厳しかった。[5]

この証言から、撮影現場でわずかでも変更があるときは電話があったことが窺える。とはいえ、撮影の最中、小津が頻繁に野田に連絡し、合意を得るのは難しい。現代とは異なる通信環境であれば尚更だろう。したが

って、その数は多くなかったことが推察される。

出演者の発言もある。1927 年の小津の第一回監督作から出演した俳優の河原侃二 [6]は、「トーキーになってからの話だが、小津さんは台本のセリフを絶対に変えなかった。（もちろん決定稿台本が出来上がるまでに充分検討しつくしてあるので、撮影現場で変える必要がないのだが）」[7]と記している。

一方、例外として知られていた撮影中の変更もある。たとえば、小津組で『早春』(1956)など3作の助監督を務めた田中康義は、小津が珍しく台詞を変更した逸話を紹介している。競輪に詳しかった俳優が、『早春』の競輪用語の誤りを小津に指摘した結果、台詞が修正された [8]、というものだ。同作では他にも、宮本明子が指摘しているように、例外的に変更された箇所が判明している [9]。

また、『秋刀魚の味』に出演した三上真一郎は次のように、撮影で新たな台詞が追加されたことを語っている。

> 落ち込んでる父親を慰める伜（ぼくです）の台詞が何ともいいんです。実はあそこの台詞は、撮影の直前に突然増えたんです。[10]

これは、後述するⅠb 例6のこととみられる。ほかには、『晩春』の京都の宿屋の壺のショットが予定外で撮影されたという逸話 [11]や、『お早よう』で軽石をめぐる台詞が加えられたという逸話も残っている。後者は新聞記事にもなっている。当時の『お早よう』プレスシートには、「型破りの続出　前例のない台本改訂」と題して、「小津作品では前例のない台本の改訂が行われた。（中略）「もしかすると死んじゃうかも知れない。」というセリフを加え」とある。そのプレスシートを受けてであろう、『産経新聞』の記事では、「前例ない台本訂正」と題され、「もしかすると死んじゃうかも知れない」という台詞を加えたことが報じられている。[12]後述するⅠb 例3とみられる。一般紙面にも小津が台本を修正することは「前例がない」と書かれているのだ。こうした報道も原因になり、小津は台本を変えないという印象が広がったと考えられる。

以上、いくつかの例外的に知られている変更を挙げた。しかし、これらはあくまで例外として知られる変更である。本人たち、ならびに脚本執筆の近くにいた野田母娘や小津に近い助監督、俳優らの証言、そして、例外はあってもそれはごくわずかであることを示す言説から、小津は決定稿以後はその内容を変更しない、とみられてきた。小津研究の基礎を築いたドナルド・リチーの書籍においても、「いったん脚本が完成されると、それ以後の変更はなかった」[13]と述べられている。小津が撮影中に台本の変更をしないことは定説とされてきたのだ。

これに対して、松浦莞二は、『東京物語』(1953)の監督使用台本にある書き込みを調査分析し、小津は台本完成後に数は多くないものの、一般に考えられているよりも多くの内容変更をしているのではないか、と指摘した [14]。しかしながら、これらの変更は台本に書き込まれているものの、野田高梧と共に撮影前になされた可能性を排除しきれなかった。つまり、撮影中に多く変更があったとは断言できなかったのだ [15]。

やはり小津は定説通り、撮影時に大きな変更はもとより、小さな変更もしなかったのだろうか。撮影中に思いついた新しい台詞や演出を採用することはなかったのだろうか。こうした疑問は解決できないままであった。

しかし、2023 年に小津組助監督が撮影に使用した台本が発見され、定説を覆す事例が見えてきた。

1.　発見

2023 年に小津組助監督が撮影に使用した台本が発見された [16]。齋藤武市が使用した『麦秋』(1951)、田代幸三が使用した『お早よう』(1959)、『秋日和』(1960)、『秋刀魚の味』(1962)の台本4冊である。スタッフが撮影に使用した書き込みの多い台本はこれまで見つかっていなかった [17]。とりわけ、『麦秋』、『お早よう』に関しては小津の使用した台本も残されていないため、極めて貴重である。いずれにも、多数の台詞やト書きの変更が書き込まれており、それらが完成作品に反映されていた。このことから、小津が台本完成後に台詞などに多くの変更を加えていた可能性が高まった。これらは助監督の書き込みであるために、変更が撮影段階のものと推測できたのである [18]。

これらの台本の発見を踏まえて、2023 年時点で各地に保管されている小津安二郎監督作品の台本の調査を行った [19]。小津は撮影中に台本変更をしないと思われていたためか、これら現存するすべての台本を対象とした調査ははじめてであった。

このうち、川喜多記念映画文化財団の監督使用台本から、小津の書き込みと、今回発見された助監督使用台本の書き込みがほぼ一致していることを確認できた。また、発見された助監督の台本には、スタッフ以外は知りえない大部屋俳優の一覧、一般に明らかにされていないロケ先の電話番号など、会社内の情報が入っていた。これらから、今回発見された台本が実際に撮影に使用されたものだと判定できた。

同財団所蔵監督使用台本と発見された助監督使用台本を比較したところ、明らかになったことがもうひとつある。助監督使用台本にのみ書き込まれている内容があり、完成作品もその助監督の書き込みの通りになっている箇所がかなりの数あることだ。もし、台本印刷後から撮影開始の間に小津が変更を決めたとすれば、小津の台本にも書き込みがあると考えるのが自然だろう。しかし、監督の台本にそれはなく、助監督の台本にはあった。これは撮影中に小津が台詞やト書きの変更を指示し、助監督が書き取っていたことを示しているだ

ろう。

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵台本から分かったこともある。俳優が使用した台本に、台詞変更の書き込みがあった。こちらも小津が撮影中に台詞の変更をしたことを示しており、小津が撮影中に変更を行っていた可能性がより高まった。

さらに助監督使用台本の調査を続けたところ、台詞の変更を編集の段階でも行っていたことを示す資料を発見できた。『お早よう』台本の s21[20]では、「今月の婦人会の会費」とある部分に「サウンドはめかえ」と記され、「先月の婦人会の会費」へと変更されている。完成した映画でも、「今月」ではなく「先月」と発声されている。したがって、編集時に台詞を「サウンドはめかえ」し、変更していたことがわかる。

小津が台詞を編集時に差し替えていたことを示す記述は、管見の限り見当たらない。しかし、『お早よう』助監督使用台本巻末には「サウンド」と記された一覧が残っており、そこには二頁にわたって、アフレコする台詞とともに「リーレコ（入れ替え）」する台詞などが記されていた。これは小津が編集時点で台詞を「リーレコ」、つまり、音声入れ替え（リレコーディング）していたことを示す疑いようのない資料といえよう。小津は台本完成後、撮影や編集段階においても台詞を変更するなど、推敲を重ねていたのである。

では、台本完成後に具体的にどのような変更がなされていたのだろうか。

図1　発見された助監督使用台本（個人蔵）表紙。

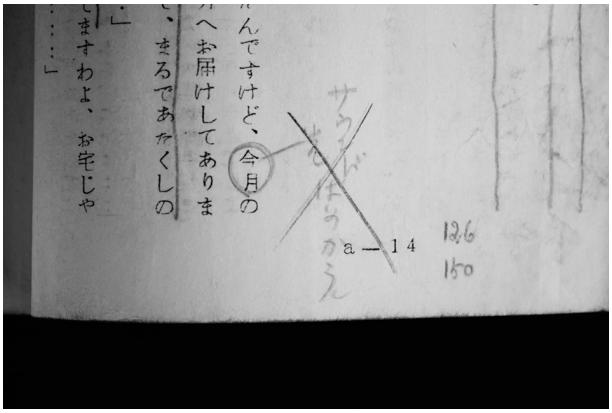

図2　助監督使用『お早よう』台本（個人蔵）s21 が記載されている頁。「今月の婦人会の会費～」が「サウンドはめかえ」で「先月の婦人会の会費～」に変更されている。

2.　変更点の詳細

発見された助監督使用台本から、変更のあった数[21]は、『麦秋』が 214 個、『お早よう』が 329 個、『秋日和』が 181 個、『秋刀魚の味』が 333 個であった。数が非常に多いことがわかる。これらを次のように分類した。代表的な事例を挙げながら確認する。

Ⅰ　二文以上からなる大きな変更
　a 場面の追加や削除、b 二文以上の追加や変更

Ⅱ　一文以下の小さな変更
　a 一文の追加や変更、b 一文内での変更、c さらに小さい変更、d 音声の差し替え、e ト書きの変更、f 不確定の確定、g 複数回の変更

Ⅲ　書き込みのない変更

Ⅰ　二文以上からなる大きな変更＞a 場面の追加や削除

場面が追加や削除された変更例は、下記の通りである。いずれも短い場面の追加や削除であり、長い場面のものではなかった。

・Ⅰa 例1『麦秋』s44（家族で歌舞伎鑑賞に出かけた夜の場面）

一家団欒の場面の前に「歌舞伎座　空客席（暗い）」という短い場面が追加された。

・Ⅰa 例2『秋日和』s2（法事の庫裡での場面）

場面ごとすべて削除された[22]。

・Ⅰa 例3『秋刀魚の味』s99（娘の結婚後、終局の場面）

物語最後に父が階段を見上げて水を飲む場面が足された。この追加は以前より知られているが[23]、助監督

の台本にも書き込まれていた。

このほか、『麦秋』s56 で孫が階段を登る場面が削除される、『秋日和』s95 で温泉街を写す短い場面が削除される、『秋刀魚の味』s76 でトンカツ屋一階の様子を写す場面が削除されるなどの変更があった。

Ⅰ 二文以上からなる大きな変更＞b 二文以上の追加や変更

二文以上が追加や変更された事例は下記の通りである。

・Ⅰb 例1『麦秋』 s137（家族写真を撮る場面）
「又かぶるの」
「どっちにしようかな」
「脱いでらっしゃい」
「はい」
以上4つの台詞が追加されていた。

・Ⅰb 例2『麦秋』s130（娘たちが秋田弁で話す場面）
台詞追加の上、秋田弁が大幅かつ全面的に修正されていた。

・Ⅰb 例3『お早よう』s100（大人たちに反抗する兄弟がぼやく場面）
「兄ちやん、お腹すいたねえ。ズーツとおヤツもらえないんだもん」
「……」
上記の弟の台詞が兄の台詞に替えられた上、次のように変更されていた。
「おい、お腹すいたなア。ズーツとおヤツもらえないんだもんなア」
「ウン。兄ちゃん、僕たち死なないね、もう軽石よさうね」
「ウン」
「まだ、石そうたまってないね。大丈夫だね」

・Ⅰb 例4『お早よう』s121（息子がパンツを出してくれよとお願いする場面）
「バカだよお前、大きななりをして、仕様がありやしない」
「僕死なないね、まちがって軽石飲んじやつたけど」
「死んぢやつたつていいよ、お前みたいな子、こんなことで学校休んで、もうお腹なほるまでご飯食べさせないよ、いいかい」
「お母ァさん、パンツ出してくれよ」
「パンツなんてはかなくつていいよ、お腹なほるまでパンツはくのお止し」
以上5つの台詞が追加されていた。

・Ⅰb 例5『秋刀魚の味』s23（中年男性たちが恩師と集う同窓会の場面）
「どうです、これ」
と佐久間にウイスキーを出す。
「アゝ、ウイスキーですか、頂こうかな」
とグラスを出して、盃を受ける。
以上のやりとりが、ト書きを含め次のように変更されていた。
「ああ、さうだつたかなあ」
「さうだよ……（渡辺に）なあ」
「それでお前停学くつたよ」
「くつたくつた」
「あの時はなんだつたんだい」
「女学生にラブレター出したんだよ」
「それがライオンに見つかつてね」
と笑い合う

・Ⅰb 例6『秋刀魚の味』s96（結婚式が終わっての夜の場面）
「俺、もう寝ちやふぞ…」「風邪引いたつて知らねえから……俺もうねちやつたぞ……」
「ウーム」
「明日また早いんだぞ……俺が飯炊いてやるから」
以上4つの台詞が追加されていた。

このような追加や変更が数箇所存在した。ほかには、『麦秋』s139 で娘の小さかった頃を思い出し、「こんな処にちょこんとりぼんなんかくっつけてよく雨降りお月さんなんか唄ってましたよ」などという3つの台詞の追加、『お早よう』s99 のやりとりで、「でもずいぶん減るのよ。一ぺんネコイラズ塗つててみようかしら」などという軽石をめぐるやりとりの変更や追加、『秋刀魚の味』s90 で「娘が嫁にいつちやつた晩なんて厭なもんだからなあ……」から始まる5つの台詞の追加などがあった。

Ⅱ 一文以下の小さな変更＞a 一文の追加や変更

一文の追加や変更の事例は、下記の通りである。

・Ⅱa 例1『麦秋』s25（娘と兄夫婦で外食する場面）
場面の終わりに、「やわらかいおいしい御飯」という台詞が追加された。

・Ⅱa 例2『秋日和』s103（娘の結婚が決まり、旅先の喫茶店で母娘が話す場面）
「ここでゆであづき食べたといつまでも覚えてるわ」という台詞が追加された。

・Ⅱa 例3『秋刀魚の味』s36（バーで軍艦マーチを聞く場面）
敬礼の姿勢を見せながら言う台詞「そうじゃないこう」

が追加された。

・Ⅱa 例4『秋刀魚の味』s63（息子が好きな女性のことを父に話す場面）
「可愛いんだ」が「小せえんだ、太つてんだ、可愛いんだ」に変更された。

ほかには、『麦秋』s8（一家朝食の場面）で、顔を洗ってきたと嘘をつく子どもに「本当かな……はい」と応じる台詞が追加された。また、『麦秋』s130（娘が親友と談笑する場面）で、「How do you do?」という台詞の「How are you?」への変更などがあった。

Ⅱ 一文以下の小さな変更＞b 一文内での変更

一文内での変更の事例は、下記の通りである。

・Ⅱb 例1『麦秋』s102（家出した子ども二人を探している場面）
「夕方出たツきり、まだ帰つて来ないの」という台詞が、「明るいうち出たツきり、まだ帰つて来ないの」と、子どもたちがより長時間家出していることに変更された。

・Ⅱb 例2『お早よう』s29（父が帰宅しての場面）
「誰だ、洗面所で万年筆あらつたの」という台詞が、「誰だ、洗面所でハミガキこぼしたの」へと変更された。

そのほか、『麦秋』s58（縁談について話す場面）で、娘の縁談候補者を「なかなかよささうなんですよ」と評する台詞が、「なかなかいいんですよ」と変更された事例などがあった。

Ⅱ 一文以下の小さな変更＞c さらに小さい変更

さらに小さい、一文字二文字の変更では以下の例がみられた。「～よ」を「～ね」とするような変更が大半であり、この数が非常に多い。いずれも物語が変わる大きなものではない。しかし、小津は野田と文末の細かなところまで練り上げていたという定説を考えると、変更が多数あることは注目に値する。

・Ⅱc 例1『麦秋』s145（老夫婦が麦畑の道を進む花嫁を見つめる場面）
「幸せでした…」という台詞が「幸せでしたわ…」に変更された。

・Ⅱc 例2『秋日和』s9（旧友の妻の魅力を語る場面）
「ありやアいい」という台詞が「ありやアいいよ」に変更された。

・Ⅱc 例3『秋刀魚の味』s77（娘の意中の人には婚約者がいると父が知った場面）
「困つたね……どうだろう」という台詞が、句点が追加され、「困つたね……。どうだろう」と変更された。映画と照合すると、「。」の部分は、かすかな舌の音を入れることで表現されていた。なお、同場面には、ほかにも二つ「。」が入る変更がある。

ほかには、『お早よう』s34（依頼された翻訳が遅れていると告げる場面）での台詞「あと、今日中にやつときますよ」の、「あと、今日中にやつときます」への変更などがみられた。

Ⅱ 一文以下の小さな変更＞d 音声の差し替え

量としては多くないものの、前節で述べたように、編集時に台詞を差し替えていたことも判明した。前節で挙げた『お早よう』s21 以外でわかりやすい事例は、下記の通りである。

・Ⅱd 例1『麦秋』s75（老夫婦が休んでいると風船が空高く上っていく場面）
台詞「でもまだ……」が、「でもこれからだってまだ……」と変更されている。完成した映画と照合すると、映像と音が明らかに一致していない。映像では「でもまだ……」と発せられているように見える。しかし、音声は「でもこれからだってまだ……」となっている。音声だけが編集段階で変更されたことを示す例である[24]。

・Ⅱd 例2『お早よう』s108（家出した子どもたちを探しに行く場面）
台詞「駅前の常設館でも探してみたら」が書き込まれ、追加されていた。完成した映画では書き込みと少し異なり、「駅前の映画館でも探してみたら」と聞こえる。台本巻末の一覧も参照すると、この部分は再録音されていたことが判明した。

・Ⅱd 例3『秋刀魚の味』s30（小料理屋の女将をからかう場面）
「ウーム……」という台詞が「ウームなア……」になり、さらに「ウームねえ……」と変更されていた。つまり、二度変更されていた。完成した映画では、音声が「ウームねえ……」となっているものの、口の動きは「ウームなア……」と発しているように見える。監督使用台本には「音いれかへ」と書き込まれているので、この部分も音声の差し替えである。

以上が、明らかに音声が差し替えられた例である。ほかにも音声を変更している箇所、そのように推測できる箇所がみられた。
このように映像と音とが一致していない部分については松浦が、『東京物語』に口の動きと音声が一致しないカットがあることを指摘している。[25]これまで、その理由は明言できるものではなく、技術的な問題が原因で

ある可能性も否めなかった。しかし、今回の助監督使用台本の精査を通じて、小津が意図して撮影後に音声を変更していたことが判明した。小津は撮影中だけでなく、編集段階でも台詞を推敲していたのである。『東京物語』に生まれた映像と音の不一致も、編集時の推敲により生じたものと推測できる。

Ⅱ　一文以下の小さな変更＞e ト書きの変更

ト書きの変更の事例は、下記の通りである。

・Ⅱe 例1『麦秋』s10（朝食を済ませた娘が二階へ上がる場面）

ト書き「箸箱を茶箪笥にしまひ、二階へ上がつてゆく」のうち、「箸箱を茶箪笥にしまひ」に線が引かれ削除された。完成した映画でも、茶碗を台所に置くのみで箸箱はしまっていない。

・Ⅱe 例2『秋日和』s72（娘が帰宅する場面）

「レインコートをハンガーにかける」に線が引かれ、削除されている。完成した映画でもそのような動作はない。そもそも娘はレインコートを着ていないため、衣装も当初の構想から変わったのだと考えられる。

・Ⅱe 例3『秋刀魚の味』s46（ゴルフクラブを試し打ちする場面）

夜の場面から昼の場面へと、時間帯が変更された。

・Ⅱe 例4『秋刀魚の味』s88（結婚式当日の自宅での場面）

「姿見だけが徒に空間の寂しさを感じさせる」というト書きが書き込まれた。なお、この書き込みは監督使用台本にはない。

ほかには、『秋刀魚の味』s87（結婚式当日の自宅での場面）のト書き「祝儀袋に百円札を入れている」が「祝儀袋を作つている」へ変更された例などがある。

Ⅱ　一文以下の小さな変更＞f 不確定の確定

不確定部分を確定した例は、下記の通りである。その数は多くないが、台本印刷の時点では決まっていなかった台詞を、撮影中に決定した変更である。

・Ⅱf 例1『お早よう』s5（主婦が会話する場面）

ほうれん草の値段が「x　十円」と台本にある部分に、「二十円」と書き込まれ、値段が確定されている。

Ⅱ　一文以下の小さな変更＞g 複数回の変更

複数回変更された事例は下記の通りである。その数は多くないが、小津が撮影中に試行錯誤していた過程が窺える。

・Ⅱg 例1『秋刀魚の味』s30（小料理屋の女将をからかう場面）

Ⅱd 例3で確認した通り、台詞「ウーム……」が「ウームなア……」になり、さらに「ウームねえ……」と二度にわたって変更された。

・Ⅱg 例2『秋刀魚の味』s61（父が娘に結婚を勧めるも断られる場面）

ト書き「ヤカンの水を茶碗に注いで呑む」が「水差しの水を茶碗に注いで呑む」に変更され、さらに「考込んでタバコを出す」というように変更されていた。なお、このト書きは最終的にいずれも採用されていない。完成した映画で、父は動作せず考え込んでいる。

Ⅲ　書き込みのない変更

台本には何も書き込まれていないものの、完成した映画では台詞や動作が変更されている部分があった。たとえば、『麦秋』の笠智衆は、家から出かける際に「いってきます」と言うように台本にはあり、何も書き込まれていない。しかし、完成作品では「いってまいります」と発している。こうした書き込まれていない変更が非常に多い。いずれも一文以下の小さな変更であるが、書き込まれている数と同程度あった。

なぜこれらの変更に書き込みがないのかは定かでない。しかし、助監督の台本には数頁にわたって書き込みがない部分もあった。助監督が撮影現場を離れ別の業務をしていた可能性がある。また、第1節で確認したように、助監督使用台本にしかない書き込みがあった。監督、助監督の台本ともに書き込みがない場合もあった。

以上のように、今回発見された4冊の助監督使用台本から変更点を分類し、例示した。このうち、Ⅱ一文以下の小さな変更、Ⅲ書き込みのない変更、が多くを占めた。

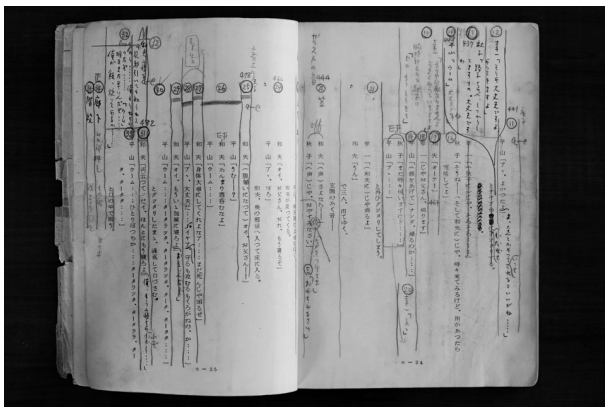

図3　助監督使用『秋刀魚の味』台本（個人蔵）s96 が記載されている頁：台詞の変更や追加などが多い例。新しい台詞の追加のほか、撮影に関する備忘録もある。

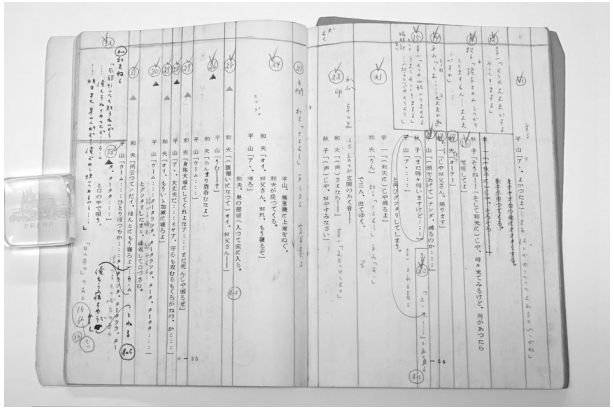

図4　監督使用『秋刀魚の味』台本（川喜多記念映画文化財団所蔵）s96 が記載されている頁：同じように台詞の書き込みがあるが、内容や表記の異なる点もあった。

3.　変更点の考察

本稿の目的は、小津が脚本完成後に内容の変更を行っていたことを明らかにすることであり、その目的を突き止めることではない。ただし、変更した理由が推測できるものについて、一部考察を試みる。

『お早よう』末尾への加筆は、最も大きな変更のひとつである。5つもの台詞が追加された。当初の台本では、s119：いいお天気ですねと言い合う若い二人、s120：場所が変わり自宅でしょんぼりする息子、s121：息子がパンツを汚したことにブツクサいう母、s122：首を垂れる息子、s123：洗濯物が干されているカットで終わることになっていた。しかし、s121：ブツクサいう母に「お母ァさん、パンツ出してくれよ」「パンツなんてはかなくつていいよ、お腹なほるまでパンツはくのお止し」など前節で挙げた 5 つの母と息子の台詞が追加されたことで、より喜劇性が高まった。『秋刀魚の味』の最終場面が撮影中に追加されたように、小津は『お早よう』においても、結末を推敲していたのだ。

他方、静寂を加える変更もある。たとえば、『麦秋』s44 である。ドリー撮影でとらえられた暗く誰もいない、静かな歌舞伎座客席のショットが挿入された。この変更は、『晩春』の有名な壺のショットを連想させる。京都旅行の夜の場面で二度にわたって映る壺のショットである。壺のショットは撮影時に追加撮影されたと言われており、実際に台本には印字されていない。『麦秋』の無人の歌舞伎座客席も撮影時に追加され、壺のショットと同様、無人の空間が映し出されている。静寂を加える変更だ。これらのショットの意義も、今後考察される価値があるだろう。『秋刀魚の味』s61 では、娘に結婚を勧めるも断られた父が、「ヤカンの水を茶碗に注いで呑む」はずであった。これが三度の変更を経て、父は何もせず、その場で考え込むことになった。これも静寂を加える変更と言えるだろう。

人物像がより鮮やかになる変更もなされた。『麦秋』s10 では、娘が朝食後に箸をしまい忘れることが追記された。一家の経済を支え、しっかりとして見える彼女もときにうっかりすることが強調されたと言える。箸という身近だが大切なものを見落としていた描写は、今まで見落としていた近所の知人の魅力に気づくという映画の主題にもつながっていると言える。一方、その兄は、家を出るときに「いってきます」から「いってまいります」と言うように、より言葉遣いが固い人物像へと変更された。さらに、『秋刀魚の味』s30、中年男性らが小料理屋の女将をからかう場面も挙げられる。仲間が死んだと嘘をつく場面だ。「可哀そうなことしちやつたよねえ……」と言う台詞に応じる「ウーム……」は「ウームなア……」となり、さらに、音声の入れ替えで、「ウームねえ……」と変更された。からかいに口を澱ませるのではなく応答する。冗談が好きな一面をより強く描いたと言えるだろう。これらは、人物像をより鮮明にするための変更と考えられる。

『麦秋』s25 では、「やわらかいおいしい御飯」という台詞が追加されていた。ここに、戦後八年目にして、柔らかく美味しいご飯が食べられるようになってきた世相を描写する意図を見出せるかもしれない。

本稿の主旨は変更の意味を読み解くことではないため、以上の考察にとどめる。重要なのは、小津が人物や世相をより鋭く描くため、これらの変更を撮影時、さらに編集中も行っていたことである。いずれも、物語が変わる大きな変更ではない。しかしその数は多く、『お早よう』においては 329 箇所に至った。1分あたり、約 3.5 回の変更があることになる。もはや、小津は台本完成後全く内容を変更しない、とは言えない。変更が少ないとすら言えまい。定説に対して、小津は台本完成後も多くの推敲を行っていたのである。

では、台本の完成度が低かったのかというとそうではない。小津が語尾の細やかな点まで指定し、即興が許される隙もなかったという点で、完成度は極めて高い。小津はその完成度の高い台本をさらに推敲していたのである。

結

小津の台本はなぜ変更がないと考えられてきたのだろうか。考えられる理由を挙げるならば、まず、これらの変更が、俳優やスタッフらに「変更」と認識されなかった可能性がある。「微調整」と受け止められ、小津の台本は変わらない、と認識された可能性である。小津を巨匠として神格化しそのように証言した、記憶違いがあった可能性も考えられる。特に俳優の場合、一人当たりの変更は多くなく、しかも台詞の細部の微調整がほとんどであった。(微調整はあるが)変更はない、と感じたのかもしれない。野田静・玲子の場合は、小津から直接変更の指示を聞いたわけではなく、間接的に野田高梧から聞いた、もしくは傍で電話を聴いていたのであろうことに留意する必要がある。小津がすべての変更を電話で野田に伝えたとも限らない。解明できることではないが、これらの推測を挙げておきたい。

これまでは、たとえ監督撮影台本を調査して書き込みを見つけたとしても、その書き込みが台本印刷後から撮影までの間のものなのか、撮影中のものなのかを判別することはできなかった。小津が撮影中に台本を推敲していたのかは分からなかったのだ。しかし、本稿では、助監督台本発見とそれに伴う調査、とりわけ、助監督の台本にしかない書き込み及びサウンドはめ替えの指示から、小津が台本完成後も、撮影や編集段階で推敲を続けた事実をはじめて明らかにした。

小津は台本完成後は内容を変更しないとみられてきたことから、台本の総合的な調査はこれまでなされてこなかった。しかし、今回を機に現存するすべての監督使用台本の調査を行ったところ、無声映画の台本にも変更の書き込みが多数確認された。これらも撮影中に変更したと推定できる。作品によって変更の多い台本と少ない台本があることも判明している。たとえば、『お茶漬の味』(1952)や『東京物語』は変更が少なく、『お早よう』や『秋刀魚の味』はかなり多い。これらの調査結果については稿を改め、明らかにしたい。

［付記］

本研究は JSPS 科研費 21K00239、ならびに同志社女子大学 2023 年度研究助成(「野田高梧日記・小津安二郎日記の比較研究」)の補助を受けたものです。さらに、査読時に貴重な助言やご指摘をいただきました。台本調査にあたり、川喜多記念映画文化財団、国立映画アーカイブ、鎌倉文学館、松竹大谷図書館、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、新・雲呼荘 野田高梧記念 蓼科シナリオ研究所、江東区古石場文化センター、おのみち映画資料館(以上順不同)の皆様にお力添えいただきました。

［注］

1) それぞれ、『限りなき前進』(内田吐夢)、『月は上りぬ』(田中絹代)、『私のベレット』(大島渚)の脚本である。
2) 「帰還第一作に着手する 小津安二郎と一問一答 安全第一を願わざるを得ない！」『都新聞』1940 年9月7日朝刊6面。
3) 「快談『早春』」『シナリオ』1955 年6月号、17 頁。
4) 野田静、井上和男編著『陽のあたる家――小津安二郎とともに』フィルムアート社、1993 年、256 頁。
5) 山内玲子、前掲『陽のあたる家――小津安二郎とともに』、266-267 頁。
6) 本稿で俳優に触れる場合、役名でなく俳優名を記した。
7) 河原侃二「新人監督時代」、小津安二郎・人と仕事 刊行会編纂『小津安二郎・人と仕事』蛮友社、1972 年、138 頁。
8) 田中康義『豆腐屋はオカラもつくる 映画監督 小津安二郎のこと』亀鳴屋、2018 年、53-56 頁。田中によると、「八レースの四―四絶対だ」という台詞の「四―四」は、元は「三―三」であった。競輪に「三―三」という目はなかったため修正されたという。『東京暮色』(1957)で「売春防止法」に言及する台詞が追加された事例もあるという。
9) 宮本明子「『早春』と里見弴―「『早春』修正入台本」上の加筆修正をめぐって―」『表象』第4号、2010 年3月、188-205 頁。
10) 三上真一郎『東京人』195 号、2003 年 10 月、49 頁。
11) 吉田喜重は、この壺のショットが脚本にないことに言及している(吉田喜重『小津安二郎の反映画』岩波書店、1998 年、159 頁)。
12) 「前例ない台本訂正」『産経新聞』1959 年3月 18 日夕刊3面。
13) Richie, Donald. 1974. Ozu. Berkeley: University of California Press: 24.
14) 松浦莞二「東京物語／東京物語」、松浦莞二・宮本明子編著『小津安二郎 大全』朝日新聞出版、2019 年、107-117 頁。
15) そのほか、撮影中の変更に触れた論文としては以下がある。森田祐三は『東京物語』の撮影に使用された台本から、いくつかの変更点を指摘している。しかし、小津が撮影中に内容を大きく変えたという結論ではない(森田祐三「映画の痕跡、痕跡の映画―「東京物語」の撮影台本―」坂村健、蓮實重彦『デジタル小津安二郎―キャメラマン厚田雄春の視』東京大学総合研究博物館、2003 年、42-43 頁)。灰谷謙二は『東京物語』の尾道の方言が台本完成後に修正されたことを挙げ、「小津作品のシナリオは、第一稿即ち決定稿が常例だが、こればかりは二重の手続きを必要とした」(灰谷謙二「小津安二郎『東京物語』における尾道方言使用の意味」『尾道市立大学芸術文化学部紀要』12 号、尾道市立大学芸術文

化学部、2013 年、46 頁)と、方言に関しては変更もあったと述べている。

16) 台本の発見は 2023 年 10 月 28 日の NHK ニュースでも放送され、4冊の台本の発見と、そこから見つかったことの一部が報じられた。報道時点では調査は始まったばかりで、全容も未確認であった。本稿では発見された台本を本格的に調査分析し、変更の数の多さや具体例など多くのことを明らかにした。

17) 『浮草』の撮影監督宮川一夫がわずかに書き込みをした台本は現存しているが、撮影に使われたものではない。

18) 小津の日記には来客者が詳しく書かれているが、そこに助監督が執筆時に長期滞在した記録はない。ゆえに書き込みが撮影中のものと推測できた。

19) 小津作品の台本所蔵状況を示す。国立映画アーカイブ・鎌倉文学館・おのみち映画資料館:台本を所蔵していない。松竹大谷図書館:複写や決定稿など台本を所蔵。撮影に使用された書き込みのある台本はない。新・雲呼荘 野田高梧記念 蓼科シナリオ研究所:台本を所蔵。撮影に使用されたものはない。古石場文化センター:『早春』『彼岸花』『お早よう』『秋日和』の台本があるが、いずれも書き込みはない。撮影に使用された『麦秋』台本があるが、子役のための備忘録が残されているのみであった(以上、2023 年6月、先方へ確認)。早稲田大学坪内博士記念演劇博物館:俳優使用台本を複数所蔵。『お茶漬の味』『東京物語』『早春』『彼岸花』『お早よう』『秋刀魚の味』に、書き込みがわずかにある。川喜多記念映画文化財団:草稿、監督使用台本など多数所蔵(以上、2023 年7月、現地で確認)。なお、東京大学において「川喜多記念映画文化財団保管資料リスト」(https://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DKankoub/Publish_db/1999ozu/japanese/14.html 、2024 年7月8日最終閲覧)が公開されているが、2024 年現在の寄託資料がすべて含まれているわけではないため、当方にて目録を作成中である。

20) s はシーン番号を意味する。シーン番号は、一部を除き『小津安二郎全集』と一致しているが、場面の追加や削除があった場合少しずれることもある。

21) 変更のあった文を数えた。ト書きも一文とした。複数回の変更は1つとして数えた。完成作品に反映されなかったものは数えていない。()に入れて説明が書き込まれたものもあったが、これも数えていない。移動は1つの変更とした。追加された文で数え方の難しい部分もあった。たとえば、「ああ払うよ払いますよ、おい、おれに赤貝」は、手書きで句点読点が曖昧なため、一文にも二文のようにも捉えられる。このような場合は、表記および文脈から適宜判断した。

22) 「秋日和(松竹)撮影中断」(『報知新聞』8月3日朝刊8面)には、「松竹大船で撮影中の「秋日和」(監督小津安二郎)は東宝司葉子の借用問題が難航しているため二日の撮影を中止、開店休業の形になった」と記されている。発見された助監督使用台本付属資料から、司の出演決定が遅れていた詳細が分かった。撮影は 1960 年7月 12 日(台本読み合わせは 11 日)から行われた。しかし、司は撮影中盤の8月6日まで出演が決定していなかったため、物語冒頭の寺での法事の場面は撮影中止になった。出演決定後に寺でのロケ撮影をセット撮影に変更し、内容を微調整して撮影となった。s18 もロケ撮影がセット撮影に変更されたことが書き込みから窺える。

23) 田中眞澄『小津安二郎戦後語録集成』フィルムアート社、1989 年、447 頁、貴田庄『小津安二郎文壇交友録』中央公論新社、2006 年、103-106 頁など、今日に至るまで多数の文献で触れられている。

24) 本変更は調査時初期に発見され、前述の NHK ニュースでも取り上げられた。

25) 松浦、前掲、112 頁。